

# 高齢化する過疎集落を支える互助と暮らしに関する調査研究

## —和歌山県龍神村殿原における‘おすそわけ’の役割—

牧之段 朝子

キーワード： 高齢化、過疎集落、自給自足、互助、おすそわけ

### 1. 研究の背景と目的

日本の国土面積の約7割を占める中山間地域では、戦後高度経済成長期以来の長期に渡る人口流出とそれに伴う地域経済の衰退を受け、高齢過疎化が進んでいる。近年では『限界集落』という言葉も生まれ、日本各地の中山間集落でこの問題はますます深刻化していくと予想されている。従来、集落の限界を測る際には、指標として祭や田役、道役などの村の共同作業に着目されることが多かった。しかし、本研究では個々の日常的な生活環境の中にある人的つながりが今後の過疎集落の行方を考える際重要な要素と考え、近隣コミュニティの形成・維持のあり方に着目し、和歌山県田辺市龍神村殿原地区を対象にフィールド調査を行った。

### 2. 調査方法と調査地区の概要

調査期間は2008年の8月から12月にかけて計5回（延べ29日間）、自由会話方式のヒアリング調査と生活の観察を中心に日常の生活環境調査を行った。ここはかつて営林署も所在し、林業で栄えた場所であるが、現在は多くの中山間地域同様、林業の不振で地域の経済状況は芳しくない。また昭和30年以降人口が一貫して減少し続けており、高齢化率も46%と高い。小学校は今年度末で閉校になり、路線バスは利用客が少なく補助金により運行されている。

### 3. 調査結果

- (1) 住民は高齢者が多いが、自給自足的な農作業に従事する人が多く作業を介した日常の近隣交流を生み出している。
- (2) 近所付き合いが活発で、食物の‘おすそわけ’が非常に盛んに取り交わされている。また病人を見舞う、畑仕事や草刈りを自分の仕事のついでに手伝うなど、互いに助け合う相互扶助の仕組みがある。
- (3) 過疎化・高齢化の進行につれ感じる、将来への心配が‘おすそわけ’を促進する一つの要素となっている。
- (4) ‘おすそわけ’は単なる物の交換ではなく、相互扶助や近隣住民交流のきっかけを作る促進剤として働いている。

### 4. 結論

これまで過疎化の進行に伴い人口が減少すると、集落機能は段階的に減少し、社会共同生活が維持できなくなり集落は弱体化し、無定住化を促進すると考えられてきた。確かに大きな集団では、もはやつながりは維持できなくなっているが、小さな集団関係に目を向けてみると違った見方ができる。人口の減少と高齢化により、ちいさな単位での付き合いはより親密になり、互いを補足しあう機能が働いている。このことから高齢化の進む過疎集落においては、そのプロセスの中で人間同士の距離が近づき、付き合いが活発化し、小さな相互扶助の仕組みがコミュニティの形成・維持に有効に働いていることがわかった。このような仕組みが今後の過疎化・高齢化の進む集落を考える上で必要な要素の一つになると考える。



図-1. 殿原地区の様子



図-2. 近隣住民の畑を手伝う様子

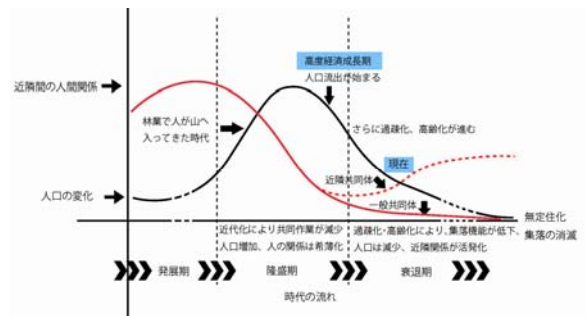


図-3. 人口推移と近隣間の人間関係との相関